

現代日本における青年の価値観の様相

橋 本 泰 子

緒 言

社会は、さまざまな構成要因が変化することにより、社会も変容をきたすものである。そこで、本研究では、現代日本の青年の価値観（職業、結婚、家族、教育、社会の5領域）について、実態調査を試みた。

特に、同時代の青年と一括しても、パーソナリティ (personality) が、外向型 (extravert type) か内向型 (introvert type) によって、相異が認められるのではないかと仮説を立て、2群に区分して、その特性の比較検討を試みた。

まず、社会変容に伴って生じてきた社会病理現象から、概観してみた。

1. 高度経済成長と社会病理現象

日本では、70年代から急激な高度経済成長をとげ、87年にはGNP世界一の経済超大国となった。しかし、その反動からか、円高危機、消費ブーム、財テク、詐欺商法、バブル崩壊に伴う銀行の不祥事、住専問題、官官接待、エイズ薬害問題、95年3月「オウム真理教」の高学歴の信者達による無差別テロ事件等、これまでに見られなかった苦慮すべき事態が生じている。

一方、社会病理現象としては、成人の場合には、企業戦士の燃えつき症候群、テクノストレス症候群、入社拒否、過労死、終身雇用制度の崩壊による中高年のリストラによる、うつ病や自殺の増加、単身赴任による離婚と家庭崩壊、空の巣症候群、アルコール中毒、育児ノイローゼ、老人虐待等。さらに青少年の問題としては、家庭内暴力、登校拒否、暴走族や性的非行、シンナーや薬物依存、いじめと自殺、幼児虐待、思春期やせ症、無気力学生、おたく族、新人類、指示待ち人間等。

以上のように、成人から高齢者、子どもに至るまで、物質的には豊かになったものの、心の荒廃といった社会病理現象が浸透しているものと推察される。

2. 成熟社会と先進国病

このような社会状況を、ガボール (D. Gabor)¹⁾ は、「成熟社会」へ移行したと指摘している。成熟社会を、佐原洋氏²⁾ は、つぎのように規定している。「成熟社会とは、経済社会における物質的生産と消費が国民の大部分の基礎的欲求水準を満足させ、これにともなって社会の活力、あるいは、成長が鈍化するに至った社会、またある側面から見れば、いわゆる先進国病に冒された、または、冒されつつある社会である」

すなわち、成熟社会には、先進国病が影のように付着しているということである。それでは、先進国病とは、一体どのようなものであろうか、林雄二郎氏³⁾ はつぎのような項目を指摘している。

(1)勤労意欲の減退、(2)出生率の減退と人口の高齢化、(3)麻薬・アルコール中毒の増加、(4)生産面では技術革新の停滞や投資意欲の減退、企業家意欲の低下、(5)各種の社会規範の弛緩、(6)各種の犯罪の増加。

これらはいずれも、近年、深刻化している問題である。

3. 価値観の変容と文化

ところで、このような社会の変革期においては、自ずと、価値観も従来のものと大きく変容してきているものと考えられる。

そこで、価値観の変容の原因について、包括的な論理を展開している磯村英一氏⁴⁾ の類型化を、要約してみた。

(1) 社会の変化とともに人間の行為の多様化や質的な変化がみられ、人間がその増大する客体をいかに選択し、いかに適用してゆくかが問題とされる。さらに、国際化の進行、情報量の増加、教育水準の上昇、未来の予測可能性の増大などによって、認識の客体が空間的、時間的に拡大、多様化し、個人の生活とは相対的に独立した「価値」が生まれ、それが生活行動に投影し、価値観の変化の原因となっているのである。

(2) 社会変化に伴って、価値的なものが破壊され、総じて社会的状況と人間性との対立が問題となる。

(3) 人間の欲望や欲求が社会に働きかけ、社会変化を加速し、新しい社会変化を生みだしたりする。

(4) 価値観の変わらぬ側面が存在し、主として国民性や文化にかかわる価値観である。

つまりは、社会の変化に伴う人間行動の多様化と空間・時間的な拡大等により、新しい価値が成生され、それが生活に反映され、価値観の変容の原因となっている。

さらに、個人の欲望が社会変化を生じさせたりもする。一方、価値観が変化しないといった側面もあり、これらが渾然一体となって、存在しているということである。

つぎに、価値観と文化との視点からみると、米山俊直氏⁵⁾は、以下のように解説している。「文化は、各民族の後天的・社会的に習得された生活の仕方・人間精神の内面に宿る価値の体系であるのに対し、文明は人間の保持する道具、機械、施設ならびに、それらを運用するための制度、つまり人間をとりまく有形無形の人工物のすべてを指している」

すなわち、価値体系は、文化の中に包含され、文化を通して文明が存在し、社会を構成するといった緊密な関係なのである。

ところで、簡単にパーソナリティの定義と向性について検討しておこう。

4. パーソナリティの定義

駒崎勉氏⁶⁾によれば、「パーソナリティとは、生物的有機体の社会環境における特有の行動様式と、その背後にある欲求の力動性」ということになる。

その特質としては、(1)パーソナリティは生物的・生理的要因と社会的要因を基礎にする。(2)パーソナリティは社会化された面から、原始的な層へと階層的構造をもつ。躰け、教育、法律、習慣といった社会的要請や規範によって規制されながら育った面である。(3)パーソナリティは、欲求体制を中心に据えた組織体である。表層的な行動をも含めた社会的自我を中心とした欲求体制の全体像であり、人間を表現するもつとも大きい包括概念である。(4)パーソナリティは継続的発達を遂げる。(5)パーソナリティは独自性をもつ。人の適応を見ると、みな異なっている。それは適応生活を展開する欲求体制が、みなそれぞれ独自の発達を遂げているからである。

要約すると、パーソナリティ形成には、生来的なものと、社会的要因が大きな役割を果たし、個人が独自性を持ちながら、社会に関与しているということである。

5. ユング (C. G. Jung) の向性による類型

ユング⁷⁾は、パーソナリティ活動の根源である精神的エネルギーが、外界に向けられるもの(外向性)と内面に向けられるもの(内向性)とに分けている。前者は興味や関心の対象は常に環境に向けられ、自己は他を眺める主体として意味をもち、社交性に富み行動的である。後者は、自己を対象として分析し、自分は周囲から、いかに眺められているかということを問題にする。したがって自閉的で精神的である。自分を無理してまで周囲に合わせようとはしない。

このように、ユングの理論から、パーソナリティが、外向性か内向性かによって、価値判断や行動が異なってくるものと考えられる。人間は複雑であるため、単に向性によって、類型化することに問題はあるものの、しかし、その時代を先取りしたり、同調するといったタイプと、主体制を重んじ、周囲に影響されないタイプとが存在することにより、むしろ、現代の価値観の特性を浮き彫りにしてくれるものと推察される。

対象と方法

95年12月に予備調査として、大学生 400 名を対象に、職業、結婚、家族、教育、社会の 5 領域について自由記述をしてもらい、その内容を因子分析し、負荷量の高い項目を抽出した。それに基づいて55の質問を作成し、5段階法、大いに賛成（全くそう思う）から大いに反対（全くそうは思わない）の評定尺度で評価してもらった。

ついで、Y-G 性格検査⁸⁾の社会的向性の10項目を外向・内向の2群に区分するために付記した。社会的向性の得点が6点以下を外向群、14点以上を内向群とした。

対象は、都内及び近県の4年制と短大の学生で、調査は、96年1月に実施した。対象の人数等については、表1に示す通りである。

表-1 対 象

	外 向 群		内 向 群	
	男 子	女 子	男 子	女 子
人 数	22	33	16	18
年 齢 M	19.5	19.3	19.8	19.6
SD	0.79	0.59	0.73	0.60
範 囲	19-21	19-21	19-21	19-21

結果と考察

I 外向群と内向群における性差の比較

2群間内で有意差（t検定 $p < 0.5$ ）の認められた項目は、20項目（36.4%）で表2に示す。領域別では、職業7、結婚6、家族4、教育3である。なお、社会においては有意差は、認められなかった。項目内容を検討してみる。

〔職業〕 両群の女子は、女性は社会進出し、男女差別のない、雇用条件の整っている、理想とする職業に就くことに賛成している。

しかし、女性は、看護婦など女性性を生かす職業に就くことに反対である。

男子は、興味と職業を一致させることに、賛成と回答している。外向群の男子は、女性が結婚しても働くことに反対をしている。

〔結婚〕 女子は、結婚相手にはいろいろなことが共感ができ、価値観、人生観の一致する人で、男女は対等・夫婦平等に賛成、一方、子育ては女性の仕事、男性は参加する必要がな

表-2 外向群・内向群内において有意差 (P < .05) の認められた項目

領域	質問項目	外向群				内向群			
		男子		女子		男子		女子	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
職業	男女差別のない職場で働きたい	*3.95	1.21	4.45	1.00	*4.38	0.71	4.56	0.51
	雇用条件の整っている企業に就職したい	**4.00	1.23	4.45	0.75	***3.81	0.75	4.56	0.51
	自分が理想とする職業に就きたい	*4.27	1.20	4.48	0.83	*4.44	0.89	4.72	0.57
	女性は社会進出すべきだ	***3.68	1.21	4.30	0.84	*3.94	0.85	4.22	0.80
	女性は結婚しても働くべきだ	*2.91	0.86	3.18	0.95	*3.13	0.71	3.33	0.76
	自分の興味と職業を一致させることが大切である	*4.18	1.13	3.82	0.91	**4.19	0.91	3.61	0.84
	女性は看護婦、保母など母性・女性性を生かす職業	**2.77	1.10	2.06	0.96	*2.56	1.09	2.06	1.10
結婚	結婚相手は、いろいろなことに共感できる人がよい	*4.32	1.08	4.64	0.82	***3.94	0.99	4.72	0.57
	結婚したら、妻は夫に従うべき	*2.64	1.32	2.09	1.18	**2.63	0.95	1.83	0.98
	価値観、人生観の一致する人と結婚	*3.95	1.09	4.27	1.00	**3.75	1.06	4.33	0.90
	男女は対等、夫婦は平等	***3.73	1.42	4.42	0.93	*4.06	1.18	4.44	0.70
	子育ては女性の仕事なので男性がする必要はない	**1.95	1.04	1.48	0.93	**2.19	1.37	1.39	0.60
	男性にも育休も取り、育児をすべきだ	*2.82	1.29	3.39	1.39	*3.38	1.25	3.00	0.97
家族	夫婦仲良く暮らす家庭が理想	*4.59	0.95	4.76	0.61	*4.50	1.09	*4.89	0.47
	家族は、お互いに尊敬しあう	**3.82	1.22	4.52	0.75	*3.94	1.23	4.28	0.89
	くつろげる家庭が理想	**4.45	1.05	4.88	0.33	*4.56	0.62	4.72	0.57
	社会で信用できるのは、自分の身内や家族だけ	*2.55	1.29	2.06	1.14	**2.63	1.14	1.94	0.87
教育	子どもに早期教育を受けさせるべきでない	*3.36	0.90	3.06	0.89	*3.25	1.00	3.06	0.63
	子どもは、塾に行かせるべきでない	*2.90	1.15	2.67	0.69	**3.13	0.95	2.61	0.60
	教育とは道徳を身につけること	*3.91	1.10	4.21	0.85	*4.06	0.57	3.78	0.73

t検定

- * P < .05
- ** P < .01
- *** P < .001

評価尺度

- 大いに賛成の場合.....5
- やや賛成の場合.....4
- 賛成とも反対ともいえない場合.....3
- やや反対の場合.....2
- 大いに反対の場合.....1

い。結婚したら妻は夫に従う。これらに反対である。外向群の男子は、男性も育休を取ることに対し、反対と回答している。

〔家族〕 女子は、家族は互いに尊敬し、夫婦仲よく暮らす。くつろげる家庭が理想に賛成している。しかし、社会で信用できるのは、身内や家族であるのに対し、反対と回答。

〔教育〕 女子は、子どもを塾に通わせない。これに反対。外向群の女子と内向群の男子が教育とは、道徳を身につけることに賛成。

〔小括〕

以上の結果より、まず女子が〔職業〕、〔結婚〕における性差別に対し、反論を表明している。

〔職業〕について具体的な実態から検討を試みる。95年の「女性の社会進出度指数」⁹⁾では、日本は世界で27位、しかし、女性の政治経済参加度は37位、さらに公務員、管理職の割合は81位と立ち遅くれが目立っている。

96年、米国と日本の女性を対象に、「セクシャル・ハラスメント日米共同世論調査」¹⁰⁾の結果では、「女性が就職する時や職場などで差別されたりすることがある」日本、多い68%、米国、かなりある39%、「企業がセクハラが起きないように取り組んでいるか」不十分、日本75%、米国59%、以上のように差が認められる。

さらに、バブル崩壊後、不景気のために、女子大生は「超氷河期」と呼ばれるような就職難が続き、それでも最近では、景気回復の薄日がさしてきたとされるものの、面接時に性差別を受けることが多く、それに対応する相談所も設置されている。

労働省¹¹⁾は、96年6月から特設した相談窓口に、3カ月で、4,131件の悩みが寄せられ、企業名が分かった2,110件のうち、問題がなかったのは1割程度で、7割近くは男女雇用機会均等法の違反等の問題があったことを報告している。そこで、なぜ、このような職場や結婚生活において、性差別が生じてきたのか、起源に立ち戻って、東清和氏¹²⁾の解説に依拠して考察してみる。

1. 男女の役割分担の起源

- (1) 男性が狩猟や漁労をし、女性が食物を貯蔵したり、食事の仕度をしてきた。ここに男女の役割分担の起源を求める。しかし、すべての部族にあったかという実証は難しい。
- (2) 農業社会においては、種まき、刈り入れ、食事の仕度などに従事していた男女には、多くの場合、役割分担は明確ではない。分業よりも協業が行われていた可能性が強い。
- (3) 男性が、工事や事務所で仕事をし、女性が家で家事、子育てに専従するようになったのは、産業革命に起因しており、1760年以降に先進工業国においてみられるようになった。かつては、実際に必要性を有し、合理的な理由もあったが、それがなくなっても自明の理のように存続しているのである。

このように、男女の役割分担の起源は、古くなく、当時は、必然性があって生じていたのに、

社会が今のように大きく変容しているのに存在するのは、なぜであろうか。

まず、性役割と性別役割の相異からみることにする。

2. 性役割と性別役割

目黒依子氏¹³⁾は、つぎのように規定している。sex role が生物的性差を基準とした役割定義であるのに対し、性差の社会的意味を含む用語として gender role が用いられる。

性差の社会的意味とは、生物学的性差を基準とした役割分業に何らかの価値づけが介入し、その価値の高低が社会的上下関係をもたらすことによって、上位の男性に下位の女性が支配されるパターンが確立していることを前提としたものである。

つまり、社会関係の中で、支配される位座をもつ女性に付随した役割が gender role であり、sex role が、性別役割であるのに対して、「性役割」と呼ぶのが妥当である。

以上のことから、「性役割」とは、男性が支配者で、女性が被支配者といった上下関係の概念なのである。

3. 能力における性差

科学的視点から、性差における能力の比較をすると、男性が優位と認められたのは、攻撃性・視空間能力、数学的能力で、女性の場合は、言語能力である。このように性差が認められたのは、4項目だけである。

しかし、現実には、社会生活において、性差が存在するのであるが、職業面においてはどのようであるのか比較してみる。

4. 職業における性差

女性が、職業において、雇用・賃金・昇進解雇等で、差別を受けている。実際に、就職時に、一般職か総合職かの選択が課せられている。このような現象が生じるのは、東・目黒両氏の指摘によれば、つぎのような要因が重複しているからである。

- (1) 女性の主婦役割を強調し、教育や職業の領域での女性の位置づけが、徹底されなかった。その結果、職業選択の自由といった基本的人権が侵害されることになった。しかし、女性も与えられた役割を演ずることで、社会体系維持に貢献してきた。
- (2) 性別役割分業に関する規範が支配的で、女性の職業活動のための準備が遅れている。さらに、女性の就職が評価も収入も低い職種にかたよっている。
- (3) 女性が就職できたのは、特定の職種ないしは、男性が去った後を埋めるものであった。
- (4) 女性イメージの強い職種への大量進出のために、低賃金となった。
- (5) 看護婦や保母は、専門職であるが、養護役割と決めつけられて、女性の職種となって、低

賃金体系にされてしまった。

- (6) 女性が高等教育を受けることが、キャリア志向をもつ就職を促すことにならなかった。
- (7) 終身雇用制度や年功序列型賃金体系、役職につくことは男子に有利で、女子は、結婚、出産、養育、家事の役割から、M字型就労形態となり、不利である。
- (8) パートタイム労働者の多くは、主婦であるが、長時間・低賃金で働き、フルタイムの雇用者が得る恩恵は受けられない。

このように、女性が職業で差別されるのは、性役割といった社会的圧力から、生じてきたものなのである。この調査で、女子が、差別に反論を表明しているのは、さまざまな差別を認識した結果と解釈される。〔結婚〕について、検討をすすめるとしよう。

1. 女子は夫との同一志向

両群の女子は、結婚相手は、価値観、人生観の一致する人を希望している。

これは、対象が学生であるため、二重構造になっていることも、つぎの調査結果から推察される。東氏¹²⁾は「米国と日本の女子大生」の比較から、興味深い所見を提唱している。

男性の愛着に関しては、自己志向的な女性と他者志向的な女性とでは、タイプの違った配偶者を見つける可能性が高い。他者志向的な女性は、達成志向性の強い男性に愛着を抱き、彼と結婚し、彼に対して心理的に同一視することによって、彼がなした達成行動に代理満足する。

自己志向的な女性は高い自律性と、自己統制能力をもち自らの達成欲求を自分自身の手で充足しようとする。お互いの心を重ねることよりも、それぞれの行動の自由度をより広く保持しようとし、相互に依存することを避けようとする。

日本では、前者のタイプが多いが、後者も増加する傾向が窺える。しかし、社会規範への同調性の高さを考慮に入れるねらば、内心では自己志向的であっても、他者志向の可能性はある。

確かに、対象者の年齢を考慮すると、まだ経済的自立をしていないことも、他者志向になりやすい要因であろう。

2. 女子は夫婦平等志向

ところで女子は、男女対等、夫婦平等志向に賛成している。70年代から核家族、少子化、高齢化社会を迎え、夫は企業戦士で家庭不在、子育ても短期間で終了した主婦達が、結婚の意味を問い直し、自己実現を成就するために、職場復帰をしたり、あるいは、女性達がサークル活動のネットワークを広めていった年代でもあった。このような母親達の生き方を見て育った学生達が、母親に同一化し、平等志向を取り入れた結果と考えられる。いずれにせよ、対象者の母親達は、民主主義の教育を受けた「団塊の世代」であることが、影響しているものと考えられる。

3. 女子は伝統・保守型に反対

これまでの結果からも明らかのように、女子は、結婚後、夫に従う伝統・保守型に拒否的である。これは、従来の主婦役割に問題があるためであろう。そこで、目黒氏¹³⁾による、伝統的な主婦の特性を要約してみる。

- (1) 日本社会が規定する主婦役割の第一義性は、一人一人が自分の役割を選択することに伴う、責任から女性を解放する。しかし、男性家族員に依存する立場に、女性を閉じ込める作用を果たしている。
- (2) 日本の女性は、家族内で高い自律性を持つ、しかし、経済的基盤のない自律性は、一人の個人としての女性の自律を導かない。彼女の人生は経済的に支えている個人の支配を受けている。
- (3) 日本社会は、性差別構造をもっているのであるが、同時に、女性本人も彼女の役割についての社会的規定を支持していることも確かである。

さて、このような視点から、主婦役割を考えると、夫は「企業戦士」で、帰宅は深夜、日曜日は早朝から接待ゴルフに出かけ、主婦は「ゴルフ未亡人」。夫との会話は、「風呂、めし、寝る」の三語で、意志疎通を欠く。子どもは塾通いや、バイトで食事時間もバラバラで、「家庭のホテル化」現象を生じ、すっかり生きがいを見失い、「空の巣症候群」になった主婦が、「心身症」で病院通い。夫の停年退職を待ち受け、離婚といった深刻な問題も増加してきている。

例えば、過去30年間で、離婚件数は、2.5倍に増加したことや、50歳代の専業主婦¹⁴⁾が、夫から解放されたい割合が高いことが、報告されている。このような主婦には、女子大生はなりたくないようである。

4. 外向群の男子は保守・伝統型

外向群の男子は、女性が結婚しても働くことや、育休を取ることに反対で、いわゆる保守・伝統型である。これは外向性のパーリナリティ特性から、常に自分がリーダーで、相手をコントロールしたい欲求が関係しているであろう。

さらに、駒崎氏¹⁵⁾の調査でも、男子は一般に女性の就職を否定的にみている。これは、保守的なのではなく、むしろ、自らの職を奪われる危機感や、女性のかくれた有能さに対する劣等意識が根底にあるのではないかといった鋭い見解を出している。

その他にも、まだ「男子だから強くあらねば」といった養育のされ方も、影響しているであろう。

いずれにせよ、女子の高学歴化に伴い、社会進出の割合は高く、当然、仕事も家庭もといった形態を取り、夫婦協業になってきている。このことは、最近の調査結果からも明らかになっている。家族研究所¹⁶⁾が共働きの妻にアンケートをしたところ、家父長型は影をひそめ、男女平等

型の夫が多い。夫の家族に対する態度として、「家族サービス精神おう盛」60%、妻にものを頼まれた時「二つ返事で即行動」が46%、夫に対する態度、「対等な感じで対応することが多い」が79%と最も多かった。

最早、このような時代に移行しているのに、外向群の男子のような考えでは結婚生活が破綻するのではないかと苦慮される。

5. 男子は興味と職業の一致志向

女子は、就職難にもかかわらず、雇用条件の整っている企業へ就職することを希望しているのに対し、男子は、知名度の高い企業に就職するよりは、むしろ、自分の興味を主体に選択する傾向が認められる。

これは、バブル全盛期の90年度に、1, 2位だった「高い賃金」「多い休暇」が激減。不況で就職難の時代に会社の処遇面を重視するより、本当の豊かさと自己啓発に価値を見いだしているといった調査報告¹⁷⁾と同じである。

しかし、別の視点から見た場合、興味と職業の一致は、むしろ、「仕事も遊びも一緒」といった、いわゆる、「新人類」「マニュアル人間」「指示待ち人間」の特性ではなかろうか。平野修司氏¹⁸⁾によれば「陽気でのりがよく知的に高い、情報にくわしい技術進化にも抵抗がない。利己的な個人主義、自分を大切にす。信頼性、共感性のある人づきあいができず、対人関係が稀薄で表面的で友人ができない。高い能力がありながら自発性や創造性に欠け、規格にはまったマニュアルや指示どおりでないと動けない」、その他に、職場で、一寸したことで、挫折して、退職する新入社員が増加していることが話題になっている。

その原因としては、青年期の課題である、同一化をはかる際に、父親不在のため、同一化モデルが欠如し、心理的な成長が未発達なのである。特に母子密着で、自立ができず、「冬彦さん現象」が生じているようである。

〔家族〕 女子は、夫婦仲よく、くつろげることを理想としている。これは、従来の家父長型あるいは、父親不在型ではなく、夫婦子どもが一緒のマイホーム的家族像である。さらに、家族が相互に尊敬しあうことを求めている。かつてのように、経済権を行使して、夫が主で、妻が従といった上下関係ではなく、個として尊重し合うことを願っている。

このように、民主教育を受けた女性達が、これまでの同性達が抑圧されていたことを意識化することで、自ずと家族関係も変容してくるものと推察される。調査結果¹⁹⁾からも、夫は家族の「団らんの中心」、妻にとって夫の存在は、「よき協力者」で「よき理解者」といった肯定的なものが上位を占める報告もされている。

〔教育〕 年々、早期教育が過熟化し、親子関係に歪みが生じていることに対し警鐘がなされている。しかし、「塾に行かせない」に対し、内向群の男子を除いては、反対である。

これは、従来通り、自分の子どもは、受験競争において、少しでも偏差値の高い学校に入学させ、さらに一流企業に就職させエリートコースに乗せたいからであろうか。

近年、高齢化社会を迎えたものの、医療、福祉の立ち遅れから、老後の生活保障が貧困であるため、子どもに看取ってもらいたい願望も託されているようである。

その他の理由としては、自分自身の体験から、学校よりは、塾で指導を受けた方が良かった、楽しかったといった理由もあるだろう。いずれにせよ、教育は、親の手でするよりも、業者にまかすといった気持の表われと解釈される。

つぎに、外向群の女子と内向群の男子が、「道徳教育」に賛成している。これは、学校におけるいじめから、自殺に至った悲惨な事件が増加している。少子化のために、家庭も学校も子どもの躰を緩やかにしていた点もあるので、善悪の判断がきちんとできる子どもに育てたい。道徳教育の必要性を指摘しているものと考えられる。

なお、外向群の女子は、正義感から、内向群の男子は、普段弱者の立場になることが多いことから、このような回答を出したものと推察される。

II 向性別の比較

両群の特徴を把握するために、外向、内向群における、男女間で有意差の認められなかった項目に関して、検討を試みた。

1. 外向群

男女間で有意差の認められなかった項目は、11 (19.8%) で表3に示す。領域別では、教育4、

表-3 外向群内で有意差の認められた項目

領 域	質 問 項 目	外 向 群			
		男 子		女 子	
		M	SD	M	SD
教 育	子どもが自立するように教育する	4.23	1.15	4.30	0.80
	子どもの教育は、学校よりも家庭が中心になって行う	3.95	0.99	3.94	0.96
	子どもは厳しく育てる	3.32	1.12	3.12	1.02
	男は男らしく、女は女らしく子どもを教育する	3.64	1.29	3.52	1.12
職 業	「女は家」という考えは、古い	3.91	1.06	4.09	1.18
	女性の仕事は、職場で男性をサポートする	2.23	1.02	2.27	1.17
	年取でその人の価値が決まる	2.14	1.28	1.88	1.05
結 婚	夫婦は共きをして、助け合って生活する	3.32	0.94	3.48	1.03
	女性は子どもが生まれたら、専業主婦になる	2.68	1.24	2.55	1.37
家 族	家族と自分は、ある程度の距離をおく	2.82	1.25	2.91	1.25

職業3，結婚2，家族と社会が各々1である。項目内容を要約すると，〔教育〕子どもが自立する教育に賛成であるが，厳しく育てる，男は男らしく，女は女らしく，家庭で教育といったことに対しては，あいまいな回答になっている。

〔職業〕〔結婚〕「女は家」という考えは古いに賛成，女性の仕事は，職場で男性をサポートと，女性は出産したら専業主婦に反対。このように，性別役割や性差別に反対し，平等志向である。しかし，共働きで助け合って生活，仕事よりも，自分の生活を優先には，あいまいな回答である。なお，家族と距離をおくことに反対をしている。

以上の結果から，外向群は，子どもの教育方針は自立すること，職業や結婚に関しては平等志向であるが，しかし，共働きに抵抗があったり，また，自分の生活よりも，仕事優先になりやすく，家族の結束を求めている。これらの傾向は，外向的な特性も関与しているものと解釈される。

2. 内向群

有意差の認められなかった項目は，14 (25.2%) で表4に示す。領域別では，結婚4，職業と家族が各々3，教育と社会が各々2である。項目内容を要約すると，〔結婚〕結婚前によく理解しあうこと，友人が遊びに来る家庭を築きたいに賛成，結婚相手を選ぶとき，地位や家柄のよさ，学歴や家庭環境の似ている人との結婚に対して反対である。

表-4 内向群内で有意差の認められた項目

領 域	質 問 項 目	内 向 群			
		男 子		女 子	
		M	SD	M	SD
結 婚	結婚前には，お互いがよく理解しあう	4.81	0.40	4.78	0.54
	地位や家柄のよさが結婚相手を選ぶ基準である	2.06	1.18	1.83	1.09
	学歴や家庭環境の似てる人と結婚する	2.69	1.19	2.72	1.27
	友人が気軽に遊びに来る家庭を築きたい	4.13	0.71	4.17	1.04
職 業	就職先を決めるとき，友人の評価が気になる	3.00	1.31	2.78	1.06
	両親が反対するような企業に就職しない	2.56	1.09	2.67	0.76
	良い人間関係を保てる職場で，仕事をする	4.25	1.00	4.28	1.07
家 族	両親とは，将来同居したくない	3.06	0.85	3.17	0.85
	家族の多い方がよい	3.56	0.81	3.44	0.70
	両親は子どもの話に耳を傾ける	4.50	0.81	4.61	0.60
教 育	受験，偏差値教育には反対	3.56	1.20	3.61	0.77
	自分で物事を判断できるように子どもを教育する	4.56	0.51	4.50	0.70
社 会	女性は男性よりも，差別を受けることが多い	3.56	1.20	3.61	0.77
	社会や組織で出世することが社会で成功すること	2.56	1.09	2.56	0.60

- 〔職業〕 就職を決める時、友人の評価が気になる。親の反対する企業に就職しない。これらに反対。良い人間関係の保てる職場で、仕事をするに賛成。
- 〔家族〕 家族との同居、家族が多い方がよいに対して、あいまいな回答。子どもの話を聞く賛成。
- 〔教育〕 子どもを、物事の判断ができるように教育。賛成。受験・偏差値教育には、あいまいな回答。
- 〔社会〕 女性は男性よりも、性差別を受ける。そう思う。会社で出世することが、社会で成功することに反対。

以上の結果から、内向群は、物事を決定する時に、親や周囲の人の評価よりも、自分がどのように考えるかに判断基準をおく自己完結型である。しかし、職場の対人関係の和を重んじる。これは、「平成7年度新入社員意識調査」¹⁶⁾で、会社で最も期待することに対し、「人間関係のよい職場」が上位であった。それと一致を示す。

家族に関して、両親との同居や家族が多い方がよいに対して、本音を表明していなかったが、これは、相手を傷つけることを配慮しているためと考えられる。

子どもの教育は、子どもが物事を判断し、親が子どもの話を聞くといったように、親がリーダーシップを取るのではなく、子どもの人権を尊重する、民主的な教育方針である。

なお、女性は男性よりも、差別を受けることが多いと認識していることは、内向的なパーソナリティのため、差別や不利なことをされても、それに対して、自己主張をすとか反発することが少ないためではなかろうか。

3. 外向、内向群の特徴

外向群は、自立志向型で、表向きは、男女平等を標榜しているが、本当は、保守・伝統型で、企業戦士の傾向が認められる。

内向群は、民主的で、和を重んじ、相手の立場を配慮し、強い自己主張をしない。そのため、差別を受けたり不利な立場になりやすい。しかし、自分の考えや感性に価値を置く自己完結型である。

このように、同年代の青年でも、パーソナリティのタイプによってすなわち、ユングが提唱する精神的エネルギーが外に向くタイプと内に向くタイプで価値観が異なることが明確になった。最後に、精神科医の稲村博氏¹⁹⁾は、外向型の青年について、つぎのような鋭い論評をしている。

大部分の「おとなしい」同世代の人たちを圧倒して、少数の「心臓」ばかりが強いが、倫理的・思想的には欠陥のある行動派が世の中をひっぱり、やがてカタトロフィーに導く恐れがある。その時が、2025年と予告している。

同様に、笠原嘉氏²⁰⁾は、「退却神経症」と名付ける青年には「やさしさ業」志望という傾向が

ある。柔弱なる個人主義者の「退却」の姿を垣間見て考えさせられることが多いと憂慮している。これは、内向型特性に共通するようである。

外向型と内向型の青年達が、2氏の提唱するような危機状況に陥入らないで、成人に達し、つぎの世代を引き継ぐことを期待したい。しかし、これは、青年達だけの課題ではなく、私達、成人が、真剣に取り組まなければならないテーマでもあるように思科される。

結 語

現代日本の青年の価値観について、95年に予備調査をし、55項目の質問を作成し、96年に、4年制大学及び短大の学生を対象にして調査した。結果の整理を、パーソナリティの向性により、外向群（N=55名）、内向群（N=34名）に分類して、検討した。主な結果は以下の通りである。

I 外向、内向群における性差の比較

2群間で、20項目（36.4%）に有意差（七検定、 $p < .05$ ）が認められた。

(1) 〔職業〕〔結婚〕に関し、両群の女子は性差別に対し反論を表明している。

「女性の社会進出度指数」や「セクシャル・ハラスメント日米共同世論調査」でも、上のことを支持する結果が出ていた。

その原因として、男女の役割分担の起源や性役割と性別役割、能力における性差、さらに職業における性差等を検討してみた。結局は、社会的圧力から生じてきていることが明確になった。

(2) 女子は、夫と同一、夫婦平等志向である。これは、母親が民主教育を受けている「団塊の世代」であることが、影響を及ぼしているものと解釈される。

(3) 外向群の男子は、結婚に関して、保守・伝統型である。最近の調査で、家父長型は減少し、男女平等型に夫が多いと報告されていることから、これでは、結婚生活に破綻を生じやすいのではないかと苦慮される。

(4) 男子は、興味と職業の一致を志向している。

知名度の高い企業に就職するよりは、自分の興味を主体に選択する傾向がある。このような傾向に対して、不況で就職難の時代に会社の処遇面を重視するより、本当の豊かさと自己啓発に価値を見出ししているといった説明がなされている。

しかし、これはむしろ、「仕事も遊びも一緒」といった「新人類」、すなわち、青年が心理的に未発達で自立できていない現象のようにもとらえられる。

II 向性別の比較

両群の特徴を把握するために、群内で男女間に有意差の認められなかった項目を検討してみた。

その結果からつぎのような特徴が認められた。

- (1) 外向群は、自立志向・保守・伝統型である。
- (2) 内向群は、民主・自己完結型である。
- (3) パーソナリティのタイプによって、価値観が異なることが明確になった。
- (4) 最後に外向型の特徴は、稲村氏の指摘する行動派に、内向型の特性は、笠原氏の退却神経症の症状に共通しているようである。いずれも憂慮される現象と考えられる。今後真剣に取り組まなければならない課題と考察される。

付記、この調査にご協力下さった学生さん達と新井妥門先生、佐藤嘉晃先生、長谷川啓先生、日吉和子先生に御礼申し上げます。

研究の1部を、第26回国際心理学会と、第63回日本応用心理学会で日本心理学科纒坂英子助手助手と共同で発表しました。

引用, 参考文献

- 1) デニス・ガボール成熟社会, 講談社1973
- 2) 佐原 洋 日本の成熟社会論 東海大学出版会 1989 p. 2
- 3) 林雄二郎 成熟社会日本の選択 中央経済社 1982
- 4) 磯村英一 日本人の価値観 至誠堂 1971 p. 3
- 5) 米山俊直 日本とは何か, 近代日本文明の形成の発展 日本放送協会 1986 p. 222
- 6) 駒崎 勉 人間研究の心理学 八千代出版 1992 p. 11
- 7) 河合隼雄 ユング心理学入門 培風館
- 8) 辻岡美延 Y-G 性格検査用紙 日本心理テスト研究所
- 9) 1995年人間開発報告書 朝日新聞 1995. 8.
- 10) セクシャル・ハラスメント 日米共同世論調査 朝日新聞 1996. 7.
- 11) 労働者の相談窓口, 朝日新聞 1996. 9.
- 12) 東清和 性差の社会心理 大日本図書 1979. p. 118~128 p. 159~161
- 13) 目黒依子 女役割 垣内出版 1980, p. 104, p. 202~209.
- 14) タイガー魔法瓶のアンケート 朝日新聞 1996. 9.
- 15) 駒崎 勉 日本における大学生の生活行動と意識構造 城西大学研究年報 1991. 3
- 16) 旭化成 共働き家族研究所 朝日新聞 1995. 12
- 17) あさひ銀, 総合研究所 朝日新聞 1995. 5
- 18) 岡村一成編 性格の科学第2巻 福村出版 1994, p. 99 平野修司
- 19) 稲村 博 黙示録2025年 朝日出版 1985
- 20) 笠原 嘉 退却神経症 講談社 1988